

ワイルドのダンディズムに見る個人主義

09L014 石橋 和憲

はじめに

イギリスの作家オスカー・ワイルドは、十九世紀末のイギリス社会で一際異彩を放つ人間の一人であった。彼は卓越した話術を用いて人々を魅了し、洗練された服装で社交界の若者の憧れとなり、流行を生み出した。また、彼が発表した『ドリアン・グレイの肖像』や『ウィンダム嬢夫人の扇』などの諸作品は人々からの人気を得て、作家として名声を築き上げることになった。

しかしそんな人気の影で、一部の人々から軽蔑されたことも多かった。それはワイルドの生き方が、あまりにも世俗の価値観とかけ離れていたからである。彼の生き方は、ダンディズムという名の個人主義を貫く態度であった。産業革命後、国家の経済成長を優先していたイギリス社会の中では、個人の個性は抑圧され、自己を社会に捧げることが求められていた。個を埋没させる社会に対し、個人主義を主張するダンディズムという生き方を示し続けたワイルドは、組織のために働く者たちからは奇異の目で見られていた。

確かにワイルドのダンディズムは当時のイギリス社会において、時代錯誤なものであったかもしれない。しかし、彼がその身を持って表現していたことは、人間の精神の向上を促すものであり、現代の我々がこれから生きていく上でも、求められるべき価値観であると私は考える。

現代ではインターネットの普及というネットワーク革命により、誰もが望むものをある程度満足に入手できる機会が平等になった。一部の発展途上国では未だそのような状態が完成されているとは言えないものの、世界全体を見れば、それまでの時代に比べて個人が一生の間に取得できる情報は格段に向上し、物質的に困るということは少なくなった。二十一世紀に生きる我々が次に求めるべきは、精神の豊かさである。一人ひとりが精神的な充足を追及し、その意識を共有し合う組織へと歩みを進めるべきなのである。常に自分自身を楽しませることを説くワイルドの個人主義は、精神的な豊かさを求める意味において、大いに参考になる価値観なのではないだろうか。

一章でははじめに、ワイルドの作品から彼のダンディズムとはどのようなものなのかを探り、その定義を定める。続く二つの章で、彼のダンディズムとそれ以前に存在したダンディズムとの比較や、ワイルドと対極の価値観を持っていた人々の内面に着目する。ワイルドのダンディズムを多面的に分析することで、最終的に彼のダンディズムの本質である個人主義について論じていく次第である。

第一章 ワイルドの作品にみるダンディズム

オスカー・フィンガル・オブレアティ・ウィルズ・ワイルドは逆説の人であった。彼の言葉にはダブルミーニングをもったものが多く、表面だけで解釈することはできない。彼は常に、言葉に裏側の意味を付与させていたからだ。ワイルドの言葉で「芸術とはみな、きわめて役に立たないものだ。」というものがある。¹ これは彼の作品の一つ、『ドリアン・グレイの肖像』の序文の中にあるものだ。一見、芸術の存在価値を否定している言葉にも捉えられる。しかし、この言葉は、芸術は役に立たないからこそ個人の人間性を発展させるものだという、利便性によって歪められていない本質的な芸術のあり方を伝えているものである。

この主張はワイルドの掲げていた、「芸術をありのままに鑑賞し、その内側に意味を見出さない」という、芸術至上主義のスタイルの根本を表している。次の引用も同様の内容である。

美しいものに醜い意味を見いだす者は汚れていて魅力がない。その行為は間違っている。

美しいものに美しい意味を見いだす者には教養があり、彼らには希望がある。

美しいものに美しいという意味しか感じない選ばれた人々なのだ。

～中略～

すべての芸術は、すなわち表層と象徴でなりたっている。

危険を冒さなければ表層の下に踏み込むことはできない。

危険を冒さなければ象徴を読み取ることはできない。

芸術が映し出すものは、人生ではなく、その観客である。²

ワイルドの芸術至上主義は、単なる一個人の「スタイル」にとどまらず、当時のイギリス国家の思想そのものに対する「アティチュード」であった。そしてその「アティチュード」は、ダンディズムという、珍奇かつ時代錯誤的な生き方を構築するポーズでもあった。ワイルドは、『ドリアン・ 그레이の肖像』の序文において、上記のような芸術至上主義を唱えた以降、昂然と社会に己のダンディズムを示していく。

本章ではまず、ワイルドのダンディズムとは何だったのかということについて、彼の三つの小説作品である、『ドリアン・ 그레이の肖像』、『アーサー・サヴィル卿の犯罪』、『幸福な王子』を参考にその内容を定義していく。

I. 『ドリアン・ 그레이の肖像』に描かれた反逆の精神

『ドリアン・ 그레이の肖像』は、ワイルドが1890年に発表した生涯を通しての唯一の長編小説である。同時に、彼のダンディズムを最も端的に表現した作品であると言えよう。絶世の美青年ドリアン・ 그레이が、ヘンリー・ウォットンという、一人の貴族の弁舌によって、己の若さによる美しさを自覚し、人生を奔放に生きることを決意する。ドリアンの親友で画家である、バジル・ホールワードが描いた肖像画に彼の老いは譲渡され、ドリアンは永遠の若さを保ったまま、人生を謳歌することのみ情熱を注ぐ。これが小説の大まかな内容である。

ワイルドは主人公のドリアン・ 그레이に彼のダンディズムの理想の形を表現し、他の二人の人物に己の存在を重ねている。すなわち、ヘンリー・ウォットンとバジル・ホールワードの二人である。それはワイルド自身の「ヘンリー卿というのは世間では私自身と判断されている人物、バジルこそ私が自分自身と思っている人物、ドリアンは私になりたいと思っている人物だ」という発言からもうかがえる。³ こうしたキャラクター設定に、ワイルドの多重性をみることができる。彼の逆説的な言動も、このような多重性に基いたものと言えよう。

ワイルドは一つの事柄に常に二面性を持たせていた。そして彼の発言は不道徳な内容に満ちたもので、人々にショックを与えていた。民衆から、ワイルドそのものであると思われていたヘンリー卿の言葉にもそれは反映されている。以下はヘンリー卿と彼の叔父であるジョージ・ファーマー・ウォットンとの会話の中での、彼の叔母の慈善事業に対する取り組みに対しての言及である。

「わかりました、ジョージおじさん。伝えますよ。でも効き目はないと思いますね。博愛主義の持

ち主というのは、思いやりというものを完全に失っていますからね。それが何よりの特徴です。」⁴

この発言は博愛主義者を完全に非難するものであり、彼らの行いを思いやりの欠けたものとして卑下している。上記に引用した言葉からは、ヘンリー卿（作者の一部であるキャラクター故に、その言葉は彼の考えと同義であるとする）が慈善事業に否定的なことも窺える。次の言葉は、ヘンリー卿がドリアンのイーストエンドにある教会で、貧者達に向けてピアノ演奏をするという慈善事業の取り組みに対して発言した言葉である。

「慈善事業などに関わるには、あなたは魅力的すぎますよ、グレイさん—あまりに魅力的すぎる。」⁵

ワイルドは実生活においてもヘンリー卿並みの不道德や逆説を唱えていた。そもそも『ドリアン・グレイの肖像』におけるヘンリー卿やドリアン の台詞の一部は、彼が常日頃クラブで会う友人達に話していたものである。つまり、彼らの言葉はワイルド本人の言葉でもあると言える。何故ワイルドは博愛主義や慈善活動を否定し、社会的に是とされている道徳と相反するような思想を展開していたのだろうか。その背景には、ヴィクトリア朝イギリス全体を覆っていたピューリタニズムという思想が大きく関係する。

ピューリタニズムとは、十六世紀におこった宗教改革で、個人の魂の救済は全て神によって定められているという予定説を唱えた、カルヴァンに追従した者たちの思想である。彼らカルヴァン主義者らはピューリタンと呼ばれた。その思想は禁欲的に生活を送り、勤勉に仕事に従事することで魂の救済を得ることができるといふものであり、厳正・節制・誠実さを重視するものであった。⁶

十八世紀の産業革命によって、イギリスは他国に先駆けて工業の機械化を果たし、世界的な影響力をもつ経済大国となった。その経済活動の中心となったのが中産階級のブルジョワジーたちである。彼らは元来農業や商工業に従事していた者たちであり、自らの専門的なスキルを磨いていた独立した階級者たちであった。⁷ その多くは銀行家・資本家、商人や工場主である。⁸ 中産階級者らは、「困い込み運動」によって農地を地主貴族に私有化され、都市に労働者として流入してきた下層階級を低賃金で就労させた。⁹ その労働力を元に資産を築いていた中産階級層は、フランス革命のような圧制に反発した労働者たちの革命運動を恐れていた。そのため彼らは、ピューリタニズムを自らの生活に利用・適用し、禁欲的な倫理と勤勉な姿勢をとり、貧者に服や住居を提供するなどのチャリティーを施すことで、下層階級に不満を抱かせることを防ごうとした。¹⁰ つまり、彼らの慈善行為は己の保身のためのいわゆる偽善的なものであった。その慈善行為は他者への無償の愛という宗教的本質が抜け落ちた自己満足なものであり、労働者に対する偽善的なアピールに過ぎなかった。

また、イギリス全盛期に即位したヴィクトリア女王が、質実剛健な国家作りのために質素や仕事に勤勉に従事することを人々に強要していたことも、ピューリタニズムがイギリス社会全体に浸透する要因となった。国力増進というのが表向きの謳い文句ではあったが、その裏には自身の容姿の平凡さから生まれた劣等感があり、そのコンプレックスが道徳を遵守し慎ましく生きることを国家方針にさせた。¹¹ 故に国民も道徳的な暮らしぶりや慎ましい振る舞いをするのが求められるようになった。

こうしてピューリタニズムは経済にも結び付いた。経済活動は神への義務とされ、社会が幸福な状態を保つためものとされた。¹² 職業は霊化され、身分の貴い卑しいは関係なく、勤勉に取り組むことが求められ、富を節制して公正な目的に使うことで、神の救済が得られるという考えが人々に普及した。¹³ 結果として、社会はそれまでよりも徹底的に合理化され、イギリスのジェレミー・ベンサムが唱えた大多数の幸福を目指す功利主義を生み出す所以となった。

ワイルドのダンディズムとは端的に言ってしまえば、このピューリタニズムへの反抗と、個人が画一化することで失われていく人間性を尊重した個人主義の主張であった。そしてそれはヴィクトリア朝イギリスの国家思想そのものに対する反抗のアティチュードでもあった。ワイルドは社会が掲げた功利主義や資本主義に繋がるピューリタニズムによって、人間らしい自由で豊かな個性が失われていくことを危惧していた。

次の会話はヘンリー卿とドリアンが、バジルのアトリエで出会った際に交わしたものである。この会話の中で、ワイルドはピューリタニズムによって個性を歪められた民衆の状態を描写している。

ドリアン 「本当にそんな悪い影響をお与えになるんですか、ヘンリー卿？バジルが言ったみたいで？」

ヘンリー 「いい影響など存在しないんですよ、グレイさん。影響とは常に不道徳なものです。科学的見地から言って不道徳なんだ。」

ドリアン 「どういうことですか？」

ヘンリー 「人に影響を与えるというのは、その相手に自分の魂を与えることだからですよ。相手は自分本来の考えをなくし、本来の情熱で燃え上がらなくなる。その美徳さえ本来のものじゃなくなるんだ。その罪悪も、もし罪悪などというものがあるのならばだが、それさえも借り物になるのだ。～中略～人生の目的とは自己の開発にある。自己の本質を完全に理解する、そのために我々はここにいるのだ。最近では人々は自分を恐れている。あらゆる義務の中で、最も大切な義務を忘れている。自分自身に負っている義務だ。もちろん彼らは慈悲深い。飢えたものに食事を与え、貧しいものに服を恵んでいる。しかし、彼ら自身の魂は飢え、裸のままだ。」¹⁴

ヘンリー卿とドリアンとの会話の中で、ワイルドは義務という言葉が本来自己開発に向けられるべきところを、他者への献身のみに向けられるようになり、その実、行為の本質である愛という感情が抜け落ち、己を良く見せようという見栄や社会的なステータスを誇示するためという、欲望のみの形骸になってしまったことを指摘している。それでは義務という言葉は本来どのようなものであったのであろうか。次に取り上げる作品の中で、その本質を浮き彫りにしていく。

II. 『アーサー・サヴィル卿の犯罪』で展開された義務の本質

義務の研究という副題が付いたこの作品は、ワイルド短編小説の一つである。青年紳士のアーサー・サヴィル卿はウィンダムア卿夫人が催す夜会に出席した折、ある手相見に自分の手相に殺人の兆しが表れていることを告げられる。彼は愛する女性シビル・マートンとの結婚を間近に控え、彼女との結婚に不吉なものを引きずらないために、結婚を延期し己の運命の責務を果たそうとする。彼が企てた殺人は悉く失敗し、最終的には手相見を殺害することで彼は義務をやり遂げる。

この作品の一つのテーマとしては、運命からは逃れられないものと受け入れ、義務に忠実にそして誠実に生きることを説くピューリタニズムに、その義務の極論として殺人という題材を持ち出し、それを遂行したとしても社会的に肯定されてしまうという批判的な意見を提示しているようにも思える。現にアーサー卿は義務を完遂した後、子供を授かり幸せな結婚生活を送っていることが著されている。つまり殺人が義務となって道徳的なものとなり、社会的な義務が罪の意識にとって変わってくるのである。これはワ

イルドなりの逆説的な表現の方法である。

しかし、ワイルドはアーサー卿というキャラクターを、一見義務の是非に関わらず、運命に従うだけのピューリタニズムに感化された人間のように見せながらも、実際彼は殺人を起こしたくないという利己心を押し殺して、愛する女性のためにあえて罪を犯した人間として描いていた。

一彼に課せられた務めは疑いようも無く怖いものではあった、が、利己心をして愛を打ち敗らせてはならぬことを彼は知っていた。遅かれ早かれ我々は皆この同じ問題を解決すべく召出される一人にも同じ問が突きつけられるのだ。アーサー卿にはそれが早くやってきた一彼の資性は未だ中年の打算的なシニシズムに害われず、その心も近頃流行の浅薄なエゴティズムに蝕まれてはいない、従って義務を遂行するのに彼は何の躊躇も感じなかった。—¹⁵

アーサー卿の精神はピューリタニズムの偽善性に害されてはいないことが窺える。彼の義務の遂行への意志は、専らシビルのためという愛情に根ざしたものであった。そこには、イギリス貴族の精神の根幹にあるノブレス・オブリージュを感じることができる。イギリスが封建制を敷いていた時代に、貴族たちは支配者としての地位にあり、騎士を祖先に持つ彼らには騎士道精神、すなわち「高貴なる者の義務」があった。それがノブレス・オブリージュである。¹⁶

政治を行い、戦争においては率先して戦地に赴き、自ら騎士として戦うことや、弱者に対して無償の奉仕を行うことが、為政者としての彼らの義務であった。¹⁷ その義務の中には、女性を助け尊重することも含まれていた。当然のことながら、封建制の社会では男性が強者で、女性は弱者であるという認識が普通であった。そのため、女性に対する紳士的な振る舞いは義務の一つであった。

アーサー卿の殺人という義務の遂行は、シビルという愛する女性のために、無償なる愛を貫こうとする高潔で紳士的な意味がある。

しかしアーサー卿は快樂を正義の上に置くには余りにも誠実過ぎた。彼の愛には単なる熱情以上のものがあつた。彼にとってシビルはあらゆる善なるもの高貴なるものの象徴だったのだ。一瞬彼も己が命ぜられていることに対し本能的な嫌悪を感じはした、が、それも直ぐに消え去ってしまった。彼の感情が、それは罪ではなく一種の犠牲なのだと、彼に語りかけた。¹⁸

アーサー卿はピューリタニズムが作り上げた偽善的な義務によってではなく、彼自身の中にある愛によって義務を選択した。そこに義務の本質をみることができる。ワイルドはアーサー卿をピューリタニズムの作為的な義務という枠に囚われた典型的なヴィクトリア朝イギリス人のように描きながらも、無償の愛という本質的な義務を遂行する姿を通して、墮落した貴族たちに本当の貴族のあり方、崇高な人間性を歪曲させているピューリタニズムを批判しているのだ。

小説の最後では、アーサー卿は手相見をテムズ川に突き落とし、直後に物音に気付いて何か落としたか、と職務質問してきた警官に対して「なに、大したもんじゃありませんよ、お巡りさん」¹⁹ という言葉を返している。これは、殺人という運命をもたらした手相見を殺害することで、結果的に「手相見＝運命」そのものを消すことになる。彼は皮肉にも川の流れに運命を任せたのである。近代化していくロンドンにおいて、古来より変わることのない象徴としてのテムズ川は、変わることのない義務の本質と重なる。逆説的に言えば、このテムズ川という古来の本質に運命を流すことによって、その運命さえも支配するという意味が込められているようにも考えられるのだ。

Ⅲ. 美に利便性を求めることへの批判—『幸福な王子』—

前の二節で、ワイルドのダンディズムはピューリタニズムへの対抗姿勢であることについて述べた。その中で、彼が自己開発という個人主義を唱えていたことにも言及した。ワイルドはダブリンのトリニティ・カレッジ時代、ロンドンのオックスフォード大学時代にギリシャ語を専攻し、ヘレニズム文化に通暁していた。青年時代にギリシャ哲学の先人達を讀書尚友にし、その思考に影響を受けたことは、ワイルドが自由な人間性というものを求めるルーツになったと考えていいだろう。ヘレニズム文化への傾倒が、彼の自由な感性で人生を探究する精神を養ったことが推察できる。

ワイルドにはピューリタニズムによって人間の感性が功利主義や資本主義に偏重してしまい、芸術の深層にすら有用性を求めてしまうことを嫌悪していた。本章の冒頭にも掲げた引用にあるように、彼の芸術至上主義とは、芸術の表層の美を見て楽しむことが、その芸術が象徴している深層を感じ取ることと同意であり、芸術に対する正しい姿勢であるということを説くものである。

芸術が人生を模倣する以上に、人生は芸術を模倣する。これはただ単に、人間が持つ模倣本能から生じているだけではなく、人生そのものの持つ自意識的な目的が、人生の表現方式を発見するという事実から生じている。そして芸術は人生に美しい表現様式を与え、結果的に人生はその活力を実現させる。²⁰

これは、ワイルド自身の言葉である。芸術の前にまず人生があり、芸術は人生を彩りあるものにするための要素であるということを行っている。但し、これは“精神的な有用性”であり、“物質的な利便性”は科学に求めるべきである。科学に求める利便性を芸術に同じように求めたところで、それは筋違いな行為であろう。

このように、ワイルドの目にピューリタニズムは、善意や義務という概念の高潔さを歪め、純粹で自由な感性をも硬化させるものと映っていた。彼が書いた童話『幸福の王子』には、全てにおいて有用性を求めるピューリタニズム批判が表れている。

ある街に立つ金箔に覆われた王子の像が、越冬の道すがらその街に立ち寄ったツバメに、動けない自分の代わりに貧しい者を救う様に懇願し、己の体にある宝石や金箔を全て貧者に分け与えるという、無償の愛を描いた作品だ。善行の果てに疲れと寒さでツバメは力尽き、王子の像も、不幸な人のために体を覆う装飾が剥がされ、鉛の像となってしまう。黄金の王子の像は、その外見だけで街の賞賛を集め、幸福の象徴とされていた。しかし鉛の塊となってしまった像に、街の市議会議員らは翻って罵倒の言葉を浴びせる。

「おやおや！幸福な王子はなんてみすばらしいなりをしているんだ！」

と市長は言いました。

「まったくなんてみすばらしい！」と市議会議員たちは叫びましたが、みんないつも市長のいうことに同意するのです。そして一同は像を見るために近よりました。

「ルビーが刀から抜け落ちているし、目もなくなっているし、もう金びかじゃない」と市長は言いました。「まったくのところ、乞食も同然だ！」

「乞食も同然だ」と市議会議員たちは言いました。

～中略～

そこでみんなは幸福な王子の像を引きおろしました。「もはや美しくないのだから、もはや役に立ちたくない」と大学の美術の教授は言いました。²¹

ここでの権力者たちは、美に対して完全に有用性しか求めていない。彼らにとって大事なのは自分達の権力を象徴してくれるための美であり、芸術だった。彼らの芸術に対しての見方は穿ったものではない。美の象徴しているものの本質を見ていないのである。

王子はじっさい非常な賞賛的でした。「風見の鳥みたいに美しい」と、芸術的な趣味の所有者との評判を得たがっていた市会議員のひとりが言ってから、「ただ、それほど役には立たんがね」とつけ加えました。それは非実際的な人間だと考えられはしないかと、それが心配でそう言ったのですが、じつは非実際的な人間ではなかったのです。²²

美術の教授や芸術愛好者でさえも、芸術に利便性を求めていたのである。その原因はピューリタニズムを信奉する国家から異端と見られたくないという恐怖心である。上記の引用部分からは、個人が常に他者の視線を感じながら、監視されているかのように生きなければならないという閉塞感を持っていることが窺える。ワイルドは“物質的な利便性”が“精神的な有用性”に介入してきたことにより、自由で豊かな感性を持ち合わせた個人主義が迫害されてしまうことを批判していた。『幸福な王子』は童話でありながらも、ピューリタニズムの影響によって歪められた美と、美の本質をピューリタニズムという社会思想に組み込んだ人間を描いた作品であった。

以上この章では、ワイルドの三つの作品を取り上げ彼のダンディズムについて述べてきた。ここでその内容を整理すると、彼のダンディズムとは、イギリスが国家思想とした掲げたピューリタニズムと、その思想を主に提唱する、中産階級層らに対しての反逆の精神であると定義できる。ピューリタニズムの勤勉・厳正・質素・節制といった道徳を利用して、経済的弱者に対して自己満足な善意を施し、ノブレス・オブリージュの高潔な精神に立脚した義務の本質をも歪め、偽善を強いた中産階級に、個人主義を主張するものであった。だが、ダンディズムという言葉自体はワイルドが生み出したものではない。彼が生まれる以前にもダンディズムは存在した。彼のダンディズムは少なからずその影響を受けたものであり、共通した部分も多い。次章では、ワイルド以前のダンディズムに焦点をあて、彼のそれとどのような差異があったのかを検証していく。

第二章 十八世紀のダンディズム

I. ワイルド以前の初期ダンディズム

ダンディズムの発祥は、ワイルドが生まれる四十年ほど以前、いまだヨーロッパ全体がナポレオン戦争の最中のイギリスにおいてであった。そもそもダンディズムの、“Dandy”という言葉の語源は、十七世紀の初頭に用いられた“Jack-A-Dandy”（嫌な男、低劣な男という意味合い）という英語の縮小語とされている。²³ この“Dandy”という言葉が、やがて対極の意味を持つ「洒落者」を表す言葉へと変化した。その具現者であり、ダンディズムの元祖であるのがジョージ・ブランメルという男である。

彼は十八世紀の後半に流行した「マカロニー」という、派手なメイクを施し、宝石やヴェルヴェットを

過剰なまでに使用したファッションを、彼独自の美学によって昇華させた。服装の奇抜さを主張するものではなく、その仕立てをいかに上質にするかに着目した。自らの体にフィットしたサイズの上着や靴を特注させて製作し、洗練された振る舞いで大貴族まで彼のファッションを模倣した。ブランメル的美意識は、時のイギリス摂政皇太子ジョージ四世も一目置くものであった。

ジョージ四世は、次代のヴィクトリア女王とは対照的に、国事よりも芸術に傾倒した国王で、賭博や女遊びなどの浪費癖があったことから、「馬鹿王」という蔑称がつけられていた。²⁴ ブランメルはジョージ四世の寵愛を受け、洗練されたファッションと彼の美学をもったダンディーとして社交界に君臨していた。

ダンディーという言葉に対し、我々が真っ先に持つ「お洒落な男性」というイメージは、確かにその本質の一部でありえる。ダンディー、つまりダンディズムを持った者に野卑で地味な格好をした者はいない。ワイルドも常に服装には気を使い、流行を生み出してきた。彼がボタンホールにヒナゲシの花を挿して歩いていたのを見て、イギリスの青年貴族たちはこぞってこれを模倣した。²⁵ 『ドリアン・グレイの肖像』でもファッションとダンディズムとの関連を示す記述がある。

「流行」、これによって真にすばらしいものがいつか普遍的になり、「ダンディズム」、これは独自の方法で美の完全な現代性を主張するものなのだが、もちろんこの二つのそれぞれに彼は惹かれていた。彼のファッションや、その時々に取り入れている様々なスタイルは、メイフェアの舞踏会やペル・メルのクラブの窓辺にいる流行に敏感な若者達に絶大な影響を与えた。²⁶

この引用に出てくる「彼」とは、ドリアンのことである。ダンディーらは独自の美の様式を自らの体面をもってして表現しようとした。その表層には時代の変遷によって衰微していく、貴族性の主張があった。

ブランメルがダンディーとして活躍した時期を同じくして、中産階級層たちも社会的な影響力を持つほどに台頭してきた。その理由は先に一章の一節で述べたとおりである。十八世紀後半のジョージ四世の治世においては、後のヴィクトリア朝に比べピューリタニズムの影響は比較的少なかった。それでも、生産活動の大きな担い手であった中産階級層たちの勢いは、経済活動を活性化させ、イギリスを「世界の工場」に押し上げた。その力は趨勢を左右するほどになり、彼らの掲げる民主主義や平等主義、勤勉や節制といった価値観が、やがて国家を席卷するようになった。これに危機感を覚えたのが貴族たちである。

中世より常に下級層を支配する立場にあった彼らは、その権力の座を中産階級層に剥奪されることを恐れるようになった。貴族たちのあり方は中産階級層が新しく作り上げた、規則正しいリズムに敷かれた労働生活や、遊び事やファッションに浪費することなく、細々と貯蓄に励むといった現代的な生活とは相容れないものであった。貴族と呼ばれる者たちには、政治を行うことが彼らにのみ許された権利であり義務（ノブレス・オブリージュ）であった。

しかしそれは、中産階級層たちが従事していた労働とは異なる様相を呈するものである。政治を行うことは確かに彼らの義務ではあったが、それは趣味の一つに近かった。基本的に彼らはゆったりとした生活リズムの中で有閑を堪能し、年に二回ある社交界シーズンでは、都市のタウンハウスや田舎のカントリーハウスに集い、同じ貴族たちとの交流を楽しんだ。²⁷ 自由こそ貴族ら上流階級が持つ特権であり、それを利用して思案に耽り、劇やオペラ、乗馬などのスポーツに興じるのが彼らの日常の大部分を占めていた。

自由を占領し、ときに下層階級の者たちに傲岸なポーズをとってきた貴族たちの中で、フランス革命と

産業革命がきっかけによる中産階級層の躍進をみて、自分達のそれまでの封建的な貴族性が時流に逆らっていくと感じた者もいた。ブランメルに代表されるようなダンディーたちは、中流階級層に対して頑ななまでに自分達の優雅さを誇示することで、貴族としてのアイデンティティを誇示しようとした者たちだった。²⁸

能率や生産性を重視する中産階級層たちに侮蔑的な表情を向け、彼らを声高に蔑むことはなく、無言で洗練された振る舞いを貫き通した。儉約とは無縁の暮らしを送り、中産階級層との差別化を徹底した。ダンディーたちは中産階級層の画一性に、個性というものを追求して対抗した。中産階級のブルジョワジーたちは、当時黒や茶系の地味な服を多く使用していた。代表的なダンディーであるブランメルは、ブルーの上着に白のネクタイを使ったりなど、明るめの色を取り入れたり、シンプルの中にも洗練された個性を演出していた。²⁹ ワイルドも衣装の生地こだわりの、光の屈折によってブロンズにも赤色にも見え方が変わる生地を使用し、背中のカットを楽器のチェロに似せるなど意匠を凝らしていた。³⁰

ダンディーたちは、自分達の時代がすでに終わりつつあることに気付いていた。彼らがいかに個性を主張したとしても、それがかつてのイギリス社会で賞賛を浴びていたようにはならないことを自覚していたのだ。中流階級層が持つことができない、決定的な優雅さという個性を彼らに見せつけることでしか、自分たちの意義を周知させることができなかったのである。

II. 初期ダンディズムとワイルドのダンディズムとの差異

十九世紀のフランスの詩人、シャルル・ボードレールはダンディズムを実に的確な言葉をもって詩的に表現している。

「ダンディズムは時代の過渡期に現れる。貴族性が完全に衰退するわけでもなく、また民主主義もまだ完全にならない時期に」

「ダンディーの輝きは昇る朝日の輝きではなく、沈みゆく夕陽の輝きである」³¹

十八世紀のダンディズムは、十九世紀の前半、ブランメルがジョージ四世の不興をかったことが原因でフランスに逃亡した後、ジョージ四世が国王の座に就いた頃をさかみに下火になった。その後ヴィクトリア女王が即位し、ピューリタニズムに基づく国家に成りつつあるときに再び復活した。

時代の過渡期というボードレールの言葉はまさに的を射た言い方である。ヴィクトリア朝時代は、民主主義や平等主義、そして資本主義といった近代につながる価値観の萌芽が芽吹き始めた段階であった。しかしそこには未だ、旧態依然とした価値観を残留させることへの憧憬と、伝統的な慣習に個人主義を見出そうとする人々が存在した。

ダンディズムは、人が近代的な社会発展を遂げるために、人為的に排除しようとした人間性を求めていることとする動きと解釈しても相違ないのかもしれない。それはルネッサンスにおける、人文主義（ヒューマニズム）の隆盛に近い現象だ。産業革命に因る爆発的な経済成長とそれに伴う生活様式の変化。その中心であった中産階級らの勤勉で節制を是とするピューリタニズムに立脚した、厳正で道徳的な生き方は、個よりも組織を優先させるものであり、同時に個を組織に没入させた。

自由で人間らしい生き方を求めるという意味では、十八世紀のダンディズムは、貴族たちの中産階級らへの反発と失われていく貴族性への懐古的な色合いが強い。ワイルドのダンディズムは、ヴィクトリア女王

王が即位し、イギリスが全盛期を迎えた十九世紀中盤以降、国家思想となったピューリタニズムに反対し、個が持つ力の認識を拡大させようという動機に端を発している。ここまで見てくると、両者のダンディズムは個性の主張という点で共通している。

だが、ブランメルらダンディーがいた十八世紀のイギリス社会は、まだ中産階級が伸張し始めたばかりの時期であり、個の画一化は顕著に見られるものでなかった。したがって、彼らのダンディズムはむしろ、中産階級らの社会的邁進によって今後低下していくことを予感した、彼らの権力を懸命に誇示しようとする保守的なポーズである。

反対にワイルドがいた時代、十九世紀末には中産階級らは社会的な地位を上げ、五十年前よりもイギリス社会で影響力を持っていた。富裕な資本家の財力・発言力は為政者である貴族らにも決して引けを取らぬ程に浮上していた。彼らの生活の根幹にあるピューリタニズムも、以前よりも純化・徹底化され、個性の平均化を助長した。この論文の一章で叙述したとおり、ワイルドは古くからあるイギリス人の美德を歪め、自己満足の偽善に酔い、睥睨するかのように平等を謳うピューリタニズム、またその思想に染まった人間を嫌悪していた。彼のダンディズムとはそういった嫌悪が引き金となった先進的なポーズである。

つまりワイルドは、ファッションという「外面」のダンディズムに関しては、ブランメルらの洗練された服飾の美意識に着目し、これをダンディズムの表層として採用した。その表層が意図する“内面”のダンディズムは、様々な本質を歪ませたピューリタニズムへの反抗と、自由な感性で対象を捉えるという個人主義の啓発であった。そのため、ワイルドのダンディズムは十八世紀のそれと比べ、その性質をより前衛かつ進歩的なものに昇華させたものと言えよう。また、劇や小説を書いていたという作家スタンスも、十八世紀のダンディーと異なる点である。ダンディーらは、あくまで彼らの人生そのものが芸術であるという基本思考に立っているために、作品を残すという手段はとらなかった。ワイルドの場合は、これも彼の態度の一つであったのかもしれない。

第三章 中産階級の心理の深層

I. 貴族への憧憬

これまでの二つの章で、ダンディズムの反抗精神の対象である中産階級らについて、否定的に語ってきたが、ここでは彼らピューリタニズムを信奉する者たちが、自分達の地位が向上する中でどのような心境を抱えていたということに触れていく。

産業革命において、中産階級が経済の中心的な担い手となったことはこれまで逐次述べてきたことであるが、彼らを仕事に勤勉に従事させ、資産を拡大させ続けたものはピューリタニズムだけではなかった。中産階級らの心には、貴族に近づきたいという欲求があった。

中世からヴィクトリア朝期にかけてのイギリスでは、貴族ら上流階級しか大学で政治や経済を学ぶことができなかった。³² 彼らにとってその学識は就職に用いるためのものではなく、趣味の知識に近いものであり、国家から請われることで初めて仕事に就くのが通常であった。その職も国教会聖職者・医者・弁護士・高位官僚といったものであった。³³

教養的な素地で遅れをとる中産階級らは、自らの専門的なスキルをプロフェッショナルな段階に磨き上げ、それを武器に社会での地位を確立していった。資産を拡大し、富裕になってきた者の中には、貴族のような優雅な暮らしを望むようになる者もいた。つまり、彼らはピューリタニズムを蓑笠に、本心では開放的な生活を望んでいたことになる。ワイルドが嫌悪した偽善性はこういった気持ちの現れである。しか

しながら、彼らとて表立って豪華な生活をしてしまえば、下層階級からの反発を招き、クーデターが起きる可能性もあった。また貴族ら上流階級に近づいたからといっても、彼らの育ちの良さから生まれる美德や優雅さは容易に模倣できるものではなかった。

彼らは何より、自分達が国家の発展に対して成し遂げた貢献への称号を欲した。³⁴ 貴族が持つ教養という優位性に、資産と名誉という結果でもって対抗するしかできなかったのである。

貴族に接近したい中産階級らは、蓄えた財産を用いて自分達の娘・息子に、ピアノや語学、スポーツなどの英才教育を施すことで、間接的に彼らの夢を実現させようとした。³⁵ その他にも、美術品を蒐集して屋敷を飾り、メイドや使用人を何人も雇うことで貴族たちの生活を実現させようとした。³⁶ もはやピューリタニズムは中産階級の出世欲に形骸化されてしまっていたと言わざるをえない。新たな社会を作る子供達は、幼年期において個性から解離され、大人の社会的なステータスを満足するための道具として、機械化されてしまっていた。音楽や美術といった芸術は、その美の本質を楽しむものではなく、専ら個人の社会的な自意識を満足するものとして利用された。

但し、こうした英才教育は何も中産階級にのみ見られたものでない。貴族ら上流階級でさえも、自分の娘・息子を自分の意に従うものに調教していた。次の引用は、当時の貴族たちの生活を風刺したワイルドの喜劇の一つ、『ウィンダミア卿夫人の扇』からのものである。

ベリック公爵夫人 「おまえ、あのかたと五度ダンスのお約束をしたわね、アガサ！」

アガサ嬢 「はい、おかあさま。」

ベリック公爵夫人 「ちよいとその案内状をお見せ。ウィンダミアの奥さまが、また案内状を使いはじめられて、とてもうれしいよ。—これさえあれば、娘をもつ母親は安心だからね。ねえ、おまえ！よい娘さんはね、とくに貴族の子弟でも財産のもらえそうもないような、こんな男のひととワルツを踊ったりするものではありません！とてもふしだらな感じだからねえ！最後の二曲はホッパーさんとテラスへ出ているのですよ！」

アガサ嬢 「はい、おかあさま。」³⁷

これは、ウィンダミア卿の屋敷で開かれた舞踏会での、母娘の会話である。母親から決められた男性と踊り、何を言われても、はいと返事をするしか許されていない娘の様子が描かれている。まるで、人形のように唯々諾々と母親に従う様子には、おおよそ人間味が感じられない。このように、ピューリタニズムは中産階級だけでなく貴族にも浸透したことが分かる。ワイルドのダンディズムは、ピューリタニズムの潮流によってノブレス・オブリージュを忘れ、墮落した貴族に対する態度でもあった。

中産階級は貴族のような生活を望み、彼らと同等な暮らしをアピールするために、人間性より利便性を優先させた。そして貴族ら上流階級たちも、国家が是とした中産階級のピューリタニズムに取り込まれるという逆転現象が発生していたのである。考えてみれば、ダンディズムそのものも、中産階級の台頭がなければ生れなかったアティチュードである。中産階級の台頭は貴族への憧れが原動力となったものだ。そういった意味で、ダンディズムとは上流階級と中産階級とが相互に影響し合って生まれたものであると言えるであろう。

II. 抑圧された人間の心

前節で中産階級ら当時の人々が、ピューリタニズムを道徳の基盤としておきながらも、その思想に心の

中では鬱屈していたことを説明した。同時代においてもワイルド以外にも、ピューリタニズムが引き起こす無意識な心の抑圧を表現した者たちがいる。

ワイルドの劇作品『サロメ』の挿絵を描いたピアズリーは、黒ずくめの服装と痩せ細った体で不健康な美を表現した。³⁸ それはピューリタニズム国家が強要する、国家発展のための健康に対しての彼のダンディズムであった。健康が個の素晴らしさではなく、国家のためにその身を捧げていることを意味するようになってしまったことに対する彼の反抗の態度であった。

作家のスティーンソンの『ジキル博士とハイド氏』では、善良で高潔であった人間が、凶悪な二面性を生み出してしまうことが描かれている。誠実に見える人間でも、真面目になることを強いられることで、心の中に悪徳の種を芽生えさせてしまうという可能性を表現し、ピューリタニズムの影響下のイギリスを描いている。

真面目さや善への偏重は、逆に人間らしさを失わせるだけでなく、人間を破滅させてしまうほどの悪徳を生み出してしまうことに繋がる。人間を道徳で規定しすぎることが、個人の中の不満を加速させ、結果として犯罪を増加させる傾向になるのではないか。ヴィクトリア朝期のイギリスは、法律で性に関しても厳しい取締りが敷かれており、売春行為や男色は犯罪とされていた。しかし、娼婦館などの娼婦のたまり場は隠れて存在していたにもかかわらず、公にはなかったことにされた。³⁹ コナン・ドイルの作品シャーロック・ホームズシリーズでは、ロンドンの中にアヘン窟が度々登場し、アヘンが水面下で広まっていたことも事実である。ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』でも、ドリアンがアヘン窟に通っていた描写が出てくる。

ピューリタニズムの合理的な厳正思考は、経済を活性化させ、人々の生活を豊かにするはずであった。確かに国家という体裁の中ではそのように機能したであろう。実際に、この時代はイギリスの世界経済における全盛期であった。しかし、蓋を開けてしまえば、一部の人間が豊かな暮らしを独占し、人々の精神はそれまで以上に病んでいる状態であった。それはピューリタニズムによって人の無垢なる自由な精神が束縛されたからに他ならない。

勤勉に仕事に従事し質素に慎ましく生きるということは、人間の美德の一つである。だが、そういった綺麗な道徳だけでは人は生きてはいけない。使い古された表現ではあるが、人は聖人ではないのである。真面目な状態を保持し続ければストレスが溜まる。節制や儉約ばかりでは心が貧しくなる。その息抜きとなる方法が必要なのである。

それは何も悪事を働くということではない。肝心なのは、誠実さと同時に、精神にゆとりを作り出すことである。芸術や音楽、スポーツなどはそういったことのために存在するものである。それすらも真面目に組み込んでしまえば、人の心に澱のような疲れが溜まり、活性化が為されなくなる。結果として、人は疲れを払拭しようと肉体的な快楽に走ったり、アヘンに染まらざるをえなくなったりするのだ。つまりは、人間の精神には真面目さという「善」だけではなく、ゆとりという名の「悪」が必要であるということだ。

2010年に公開された映画『ブラック・スワン』では、主人公のバレリーナが、純粋なホワイト・スワンと官能的なブラック・スワンを演じるという設定の中で、「善」と「悪」の共存がテーマとして展開された。主人公のバレリーナであるニナは純粋な女性であったが、それだけでは『白鳥の湖』において完全なスワンを踊りきることはできなかった。彼女は人間の退廃的な部分を知ること、最終的にそれを受け入れスワンを見事演じきるという物語である。最終的には、純粋で優しい自分と、官能的な自分を、それぞれホワイトとブラックのスワンに演じわけることができ、両者を受け入れた自分に対して、完璧だという言葉が漏らす。

人間は「善」と「悪」が糾える縄のように絡み合っただけの個として存在しているのである。この映画では彼女は成長のために、悪をも取り込み、結果として個としての自己を確立するに至った。個の確立と成長のためにも、悪との共生は必要不可欠なのである。

人間の精神はシステムのようにプログラミングすることはできない。善の強制は人間の精神を抑圧すると同時に、人間の精神により悪質な悪徳を生み出す原因となる。ヴィクトリア朝期のロンドンの水面下で、アヘンの流通や売春が増加したことは、厳正な道徳に人々が鬱屈していた証左である。精神に適度なゆとりを作ることは、人間が人間であるために必要不可欠なことだと言える。

おわりに

本論文の一章の章末において、ワイルドのダンディズムとは、ピューリタニズムとその思想を主に提唱する中産階級層らに対しての反逆の精神であると定義した。そしてその精神の奥に個人主義への啓発があったことも二章の章末に述べた。この個人主義こそがワイルドのダンディズムの骨子となる思想であった。

彼が繰り返して唱えていた個人主義とは、個人が人生を豊かに生きることに向け、「生の実感」をいかに多く感じられるか、ということがその目標だった。中世の封建制度でもなく、ピューリタニズムが目指す個の組織化でもない、一人ひとりが自分という国家の王となり、自分のために生きることが彼の主張していたことのように思える。

彼の提唱した個人主義には本質的な愛が存在した。それはピューリタニズムの偽善的な自己満足な愛ではなく、無償の愛である。ワイルドの愛についての求心は彼の作品の随所にみられる。『サロメ』における「愛の神秘は、死の神秘よりも大きい。人は、愛だけを見つめているべきなのよ。」⁴⁰ というサロメの言葉は、愛とは死以上に強い価値を持つものだと主張しているものだ。次の言葉は『ウィンダミア卿夫人の扇』で、ウィンダミア卿夫人が発した言葉である。

「ええ。当節はみなさん人生というものを投機みたいなものと考えていらっしやるらしいですけど。投機ではありませんわ。人生は秘蹟なのです。人生の理想は愛なのです。人生を清めるものは犠牲なのです。」⁴¹

この犠牲という行為は愛の無償性と通じるものだ。ワイルドの童話の一つ、『ナイチンゲールと薔薇』では、恋をしている青年のために、その身を犠牲にして薔薇を赤く染めるものの、結局その善意は報われることなく終わってしまう。『幸福な王子』でも、王子は装飾を取り払ってしまうことで己の価値が無くなってしまったことを覚悟の上で、不幸な者に尽くそうとする。その善意はツバメの心をも動かし、その命が尽きるまで王子の善行を助けた。

ワイルドが犠牲の愛を好んで描いていたのは、それが自発的な動機に基づくものであったからだ。彼は『社会主義下の人間の魂』で、自己犠牲についてこう言っている。

事実、それ（自己犠牲）は全然いかなる要求をもたずに人間のところにくるのだ。人間のなかから自然に必然的に出てくるのだ。それが、あらゆる発展の指向する点なのである。あらゆる有機体の生長して達すべき分化なのである。あらゆる様式の生活に内在し、あらゆる様式の生活が生き生きと目指すべき完成なのである。⁴²

彼はここで、自発的な犠牲の結果は発展を促すと説いている。ワイルドは後年のアルフレッド・ダグラス卿との男色罪を咎められ国家に歯向かうことなく素直にそれを受け入れてみせた。彼は自分の美意識と愛を貫き、それが何ひとつ間違っていないと確信していた。社会に反発するのではなく、ただ自分がそう“ある”というポーズのみを主張した。彼のダンディズムとは態度であると本論文の冒頭に述べたが、まさしくその生き方は、自分の生きたいように生きる個人主義の体現であった。それは自分の価値を他者に強制するものではない。

利己的とは自分の生きたいように生きることではない。それは自分の生きたいように他人に生きよと頼むことである。～中略～ 同じ考え方で考え、同じ意見を持つべきだと隣人に求める、これがひどく利己的なのだ。⁴³

ワイルドは強力な経済大国に申し上がるために、国民にピューリタニズムを普及させ、彼らを国家のシステムの一つとして機能させようとしたイギリス国家に、個性の伸張を奨励した個人主義を体現した。人の組織化を目指す産業革命に対しての、さらなる個の確立を目標とする精神革命と言える。ワイルドの犠牲は、人間社会の発展を促したのだ。彼の個人主義は、個人の自己が確立され、誰もが人生において生きる喜びを創造できる生活様式であり、それこそが、人類の新たな思考の段階であると言えるであろう。「自発的な連合においてのみ人間は自由である」⁴⁴ というワイルドの言葉が、彼の理想とした個人主義をもった人間における社会のあり方を表している。そこでは、誰もが人生に大きな価値を見いだすことができ、高位な精神レベルを保持した生活を送れるはずである。

興味深いのは、ワイルドはあれだけ功利主義は人間性を歪めると反対していながらも、彼の理想とした個人主義が発達した社会は、皮肉にも功利主義の本質が目指す段階と酷似していることだ。イギリスのジェレミー・ベンサムやJ.S.ミルが唱えた功利主義の本質とは「最大多数の最大の幸福」であり、社会全体の幸福の実現は、その構成員である国民の、個々の幸福の多さに比例するというものである。⁴⁵ 幸福の実現のためには、精神的な快樂を求め、貧困から生れる苦痛を回避していくことが肝要であると説くものであった。⁴⁶

ワイルドも貧困が人の精神的な発展を妨げると指摘している。

金持ち以上に金のことを考えている階級が社会にひとつだけある、そしてそれは金のない連中である。貧乏人は金よりほか何も考えることができない。それが貧乏であることの惨めさなのだ。⁴⁷

ワイルドの個人主義とベンサムやミルの功利主義は、本質において同じものを追及していた。それは共に、貧困から解放された状態での個人の幸福の追求と、その結果としての社会全体の幸福の実現である。

ワイルドのダンディズムとは、ピューリタニズムによって敷かれた、人生を抑圧し個を支配する国家にたいして、個人が人生を支配することを標榜する個人主義であった。それは彼が人間に対して高い価値を見出していたからに他ならない。人は喜びを創り出すことができる高等な生物であるという認識は、他の生物を見下すというということではない。その高尚さを自覚し、生を充実させていくことこそが、「高貴なる者の義務」であり、本当の個人主義なのだ。

注

- 1 オスカー・ワイルド 『ドリアン・グレイの肖像』 仁木めぐみ訳 光文社 2006年 p.9.
- 2 同上 pp.7-9.
- 3 山田勝 『オスカー・ワイルドの生涯 愛と美の殉教者』 日本放送出版協会 1999年 p.113.
- 4 ワイルド 『ドリアン・グレイの肖像』 p.79.
- 5 同上p.38.
- 6 藤田正勝 『理解しやすい倫理』 文英堂 2006年 pp.194-195.
- 7 今関恒夫 『バクスターとピューリタニズム—十七世紀イングランドの社会と思想—』 ミネルヴァ書房 2006年 pp.86-87.
- 8 山田勝 『ダンディズム』 日本放送出版協会 1990年 p.14.
- 9 同上 p.36.
- 10 同上.
- 11 山田勝 『イギリス貴族—ダンディたちの美学と生活』 創元社 1994年 pp.220-221.
- 12 今関恒夫、前掲書 p.57.
- 13 同上 p.58.
- 14 ワイルド 『ドリアン・グレイの肖像』 pp.41-42.
- 15 オスカー・ワイルド 『アーサー卿の犯罪』 福田恆存・福田逸 訳 中央公論社 1977年 p.32.
- 16 山田勝 『イギリス人の表と裏』 日本放送出版協会 1993年 p.72.
- 17 山田勝 『イギリス貴族—ダンディたちの美学と生活』 p.24.
- 18 ワイルド 『アーサー卿の犯罪』 p.32.
- 19 同上 p.58.
- 20 山田勝 『ダンディズム』 日本放送出版協会 1990年 p.127.
- 21 オスカー・ワイルド 『幸福な王子』 西村孝次 訳 新潮社 1968年 p.24.
- 22 同上 p.8.
- 23 山田勝 『ダンディズム』 p.20.
- 24 同上 pp.22-23.
- 25 『ユリイカ 詩と批評 5』 青土社 1990年 p.86.
- 26 ワイルド 『ドリアン・グレイの肖像』 p.248.
- 27 山田勝 『イギリス貴族—ダンディたちの美学と生活』 創元社 1994年 pp.156-157.
- 28 同上 pp.52-53.
- 29 同上 pp.41-42.
- 30 山田勝 『オスカー・ワイルドの生涯 愛と美の殉教者』 p.11.
- 31 同上 p.54.
- 32 松村昌家・村岡健次・長島伸一・川本静子 編著 『英国文化の世紀1—新帝国の開花』 研究社出版 1996年 pp.15-17.
- 33 同上 p.17.
- 34 山田勝 『イギリス貴族—ダンディたちの美学と生活』 p.227.
- 35 同上.
- 36 同上.
- 37 オスカー・ワイルド 『サロメ・ウィンダミア卿夫人の扇』 西村孝次 訳 新潮社 1953年 pp.110-111.
- 38 山田勝 『イギリス貴族—ダンディたちの美学と生活』 p.229.
- 39 同上 p.224
- 40 オスカー・ワイルド 『サロメ』 平野啓一郎 訳 光文社 2012年 p.79.
- 41 ワイルド 『サロメ・ウィンダミア卿夫人の扇』 pp.81-82.
- 42 オスカー・ワイルド 『オスカー・ワイルド全集 4』 西村孝次 訳 青土社 1989年 p.341.
- 43 同上 p.342.
- 44 同上 p.312.

-
- 45 藤田正勝 『理解しやすい倫理』 文英堂 2006年 pp.241-242。
46 同上 p.241-244
47 オスカー・ワイルド 『オスカー・ワイルド全集 4』 p.317。

【参考文献】

- ・ オスカー・ワイルド 『アーサー卿の犯罪』 福田恆存・福田逸 訳 中央公論社 1977年
- ・ オスカー・ワイルド 『オスカー・ワイルド全集 4』 西村孝次 訳 青土社 1989年
- ・ オスカー・ワイルド 『幸福な王子』 西村孝次 訳 新潮社 1968年
- ・ オスカー・ワイルド 『サロメ』 平野啓一郎 訳 光文社 2012年
- ・ オスカー・ワイルド 『サロメ・ウィンダミア卿夫人の扇』 西村孝次 訳 新潮社 1953年
- ・ オスカー・ワイルド 『ドリアン・グレイの肖像』 仁木めぐみ 訳 光文社 2006年
- ・ 今関恒夫 『バクスターとピューリタニズム—十七世紀イングランドの社会と思想—』 ミネルヴァ書房 2006年
- ・ 小野修 『現代イギリス人の基礎知識—英国は変わった』 明石書房 1999年
- ・ 藤田正勝 『理解しやすい倫理』 文英堂 2006年
- ・ 松村昌家・村岡健次・長島伸一・川本静子 編著 『英国文化の世紀1—新帝国の開花』 研究社出版 1996年
- ・ 松村昌家 『十九世紀ロンドン生活の光と影』 世界思想社 2003年
- ・ 『ユリイカ 特集 オスカー・ワイルド 5』 青土社 1990年
- ・ 山田勝 『イギリス人の表と裏』 日本放送出版協会 1993年
- ・ 山田勝 『イギリス貴族—ダンディたちの美学と生活』 創元社 1994年
- ・ 山田勝 『オスカー・ワイルドの生涯 愛と美の殉教者』 日本放送出版協会 1999年
- ・ 山田勝 『世紀末とダンディズム—オスカー・ワイルド研究—』 創元社 1981年
- ・ 山田勝 『ダンディズム 貴族趣味と近代文明批判』 日本放送出版協会 1990年

(卒業論文指導教員 金山愛子)

The Individualism Seen in Oscar Wilde's Dandyism

09L014 Kazunori Ishibashi

This thesis examines the dandyism of Oscar Wilde. The object is to reveal the substance of his dandyism. This thesis is constructed of three chapters.

In the first chapter, his three novels, *The Picture of Dorian Grey*, *Lord Arthur Savile's Crime* and *The Happy Prince* are discussed in terms of dandyism. I define his dandyism through these novels as a form of resistance to the Puritanism that the middle class at that time believed in.

The next chapter focuses on the dandyism of the 18th century, which was before Wilde's dandyism. After the 18th century dandyism is considered, it compares Wilde's dandyism and the preceding dandyism. The differences being compared, Wilde's dandyism is distinguished from the preceding dandyism in that it claimed the individualism against the Puritanism, while the preceding dandyism was merely a means to cling to the declining the power of the upper classes.

In the third chapter, I look closely into the psychology of the middle class. There was an admiration for nobles in the middle class. They tried to imitate the lifestyles of the nobles, but at the same time, they were suppressed by the Puritanism. I investigate the fact in this chapter.

This thesis concludes that Wilde revealed his resistant attitude toward the Puritanism in the society by insisting on the individualism.